

# 国（復興局）施工の復興橋梁

復興局は、揺れの被害を受けた橋梁のうち橋脚破損が最も多かったことに鑑み、基礎底面の拡張や井筒工法にするなど対策を講じます。なかでも、永代橋の基礎に圧搾空気潜函工法（ニューマチックケーソン工法）を採用、後に清洲橋や言問橋、吾妻橋等へと技術が広がっていきます。

また、復興局が施工した隅田川の橋梁は、構造上でも画期的な橋を架設します。永代橋と清洲橋は、隅田川の河口に近く橋長が約180mと長いことや、船の運航等を考慮しています。そして、永代橋は国内初の支間長約100mを越す下路式アーチ橋、清洲橋は国内唯一の自碇式チェーン吊り橋が誕生しました。この2橋は、後に国の重要文化財に指定されます。

このように、復興局が手掛けた隅田川の橋梁は、日本の橋梁技術発展に大いに貢献したのです。



震災後



竣工



（右上）橋脚潜函工事第一回潜函進水（下）橋台潜函内部作業

【永代橋】 国が施工したのは新規架設が中心でしたが、永代橋は架け替えました。震災時、永代橋は、東京市による架け替え工事が行われている最中でした。しかし復興局は、この市の工事を中止、計画も白紙にして架設しました。